

# ★スティーブ・バノンの3つの教義

電子ニュースサイト QUARTZ 2月3日付に「バノンが本当に望むこと」と題する論考がのっている。トランプ政権の首席戦略官・上級顧問に就任し、国家安全保障会議の常任メンバーとして外交政策も統括するようになったトランプ大統領の側近スティーブ・バノンとはどのような人物で、どのような思想をもつ男なのか。バノンがかつて制作したドキュメンタリー映画や、バチカンの集会向けに行った講演、メディアのインタビューでの発言を2人の記者が精査して、彼の思想を分析している。そこで抽出された彼の哲学、世界観が次のように要約されている。(要約・田中)

<https://qz.com/898134/what-steve-bannon-really-wants/>

◇バノンが説く3つの教義とは

米国と西側世界の成功には、資本主義とナショナリズム(国家精神)、ユダヤ・キリスト教の価値観の3つが必要で、これらは深く関連して不可欠の要素となっている。米国はいま「資本主義の危機」に苦しんでいる。資本主義はかつて近代化と起業家精神、キリスト教徒の友人たちへの尊敬を大事にしていた。それらの「啓蒙資本主義」の原則があったから、米国は20世紀の野蛮をうまくさけることができた。ところが事態は次第に悪くなって、60年代と70年代の反体制文化とともに下降現象が始まった。ベビーブーマー世代がかつてなく甘やかされ自己中心的になってナルシズムに陥った。

(注) バノンは2010年につくったドキュメンタリー映画「グラウンド・ゼロ」のなかで、次々と人物を登場させ、ひと握りの富裕層の子弟たちが親たちから必要なものを与えられて、本来の米国の価値観を投げ捨て、墮落して「資本主義システム」を衰退させ破壊したかを描いている。

この変化が社会主義的な政策のもとになり、何事も政府に依存するような傾向が助長されて資本主義を弱体化させた。その挙句、社会主義的なビジョンがハイレベルの権力体制に浸透し、1990年代の後半には左翼が政府やメディアや学会など権力体制の多くを乗っ取った。権力の立場と地位について彼らはシステムを混乱させることができるようになり、最終的に資本主義システムを衰退させる戦略を実行にすることができた。エドモンド・バークは「フランス革命の省察」のなかで、健全な社会の基礎は人権や社会正義や平等といった抽象的な概念ではなく、伝統が世代から世代へ引き継がれる時に社会がもっともうまく機能するとのべている。ベビーブーマーたちは、このバークの責任を実践せず、国家精神と節度、家父長制度と宗教という、試されずみの価値観を投げ捨て、複数主義や性、男女平等や世俗主義などの抽象概念を支持するようになった。

◇新しいリベラル秩序

ダボス会議に集まるようなリベラルで非宗教的なエリートたちは一度政権をとると、民主主義と資本主義の諸機構を自分たちの権力で固め、富裕になることができるようにした。あらゆるところで中間層から富を奪い取った。この搾取のパターンは2008年の金融・経済危機で頂点に達した。ウォール街は、政府内の仲間の力をえて、投機によって利益を引き出し、国内の雇用やビジネスに投資しなかった。その結果、バブルは崩壊し、不道德な政府は納税者に（銀行）救済法案を押し付けた。あるのは超富裕層のための社会主義である。貧者のための社会主義はあるが、福祉国家は維持することがまったくできなくっている。リベラルが支えるこういう社会主義は終わらせなければならない。民主党も共和党もクローニズムにむしばまれ腐敗して、中産階級を犠牲にしている。米国には実際に機能する保守政党はない。共和党もそうだ。ワシントンには2つのグループと政党があるが、いずれもインサイダー取引の党であり、インサイダー取引と貴族政治が開いて、肥え太っている。

#### ◇ユダヤ・キリスト教の価値観

（注）それでは、米国人が将来の世代に伝えようとしている伝統とは、何なのか。資本主義の危機という言葉に加えてバノンがよく使うのはユダヤ・キリスト教の価値観である。グラントゼロは「米国の価値観」について多く述べ、それは当初は茶会運動に近いものだったが、次第に宗教色をおびるようになり、西側文明は資本主義に依拠し、資本主義はユダヤ・キリスト教に依拠すると主張するようになった。

資本主義は米国をうまく戦争から引き揚げたばかりでなく、欧州を復興させ、続いてパックスアメリカナを生み出した。資本主義だけでは不十分だ。ユダヤ・キリスト教の道徳的枠組みから離れると、資本主義は害悪と不正義の力になる。このことは米国の経済停滞が典型的に示している。米国の経済が健全さを取り戻し、断絶された社会の紐帯をつなぎ合わせるには資本主義をユダヤ・キリスト教の価値観で固定させなければならない。パークによれば、人権と市民社会はなんらかの抽象概念からでてくるものでなく、伝統に由来する。この伝統とは神である。人間が真実と正義の仲裁者としてうちたてた国民国家は最終的に独裁に身をゆだねることになる。その際、国家権力を究極で規制するのは神である。ユダヤ・キリスト教の価値観は、すべての市民にキリスト教徒になることをかならずしも求めない。憲法に規定された国家と宗教の分離や信教の自由を無効にする必要はかならずしもない。2つとも米国を成功に導いた伝統である。私が信じるのは、建国の父たちはユダヤ・キリスト教からでた価値観にもとづいて国家を作ったということだ。国家全体をこの価値観にのせるには、ナショナリズムを再結集して、価値観を共有しない人たちの流入を制限し止めなければならない。国民国家の至高の要素を通じてこそ、米国は世界的な世俗体制の心臓部に杭を打ち込むことができる。

#### ◇国家主義

グローバル・エリートたちは肥え太り、貧しい人の間に依存心を植え付け、移民を洪水の

ように引き入れて賃金を引き下げた。移民労働によって企業利益を上げたグローバリストとその亜流たちは、これらの外国人たちの教育と食事の面倒をネーティブの中産階層に押し付けた。無神論的な複数主義の社会秩序がはびこり、国家精神や愛国主義を不寛容や偏狭なもののみなして毛嫌いした。建国の父たちが示した道徳的な羅針盤を失って、システムは相対主義のなかに漂流した。そのため怠け者や外国の犯罪者さらにはテロリスト予備軍の権利まで擁護するようになり、町は暴力の温床となり、国家の安全がむしばまれた。

(注) バノンが製作したドキュメンタリー映画「国境戦争」では、インタビューされた人が不法移民について“右翼は安い労働力とみ左翼は安い票とみなしている”と述べている。

ゼロ成長と財政の混乱に陥った欧州連合（EU）はエリートに支配されたグローバルシステムの典型であり、彼らは自分たちを選んだ市民になんの説明責任を果たしていない。人々はEUや米国の連邦政府を信用していない。彼らは自国の主権と国家主義を望んでいるのだ。国家主義とは、キリスト教の価値観が社会の一部になるためのメカニズムだ。なぜなら国家主義はすべてを包摂するものであり、違ったバックグラウンドの人たちを米国という共通の自己意識のもとに結びつけるからである。それは少数者のアイデンティティを解消し、人種偏見なしにすべての生命を大事にする態度につながる。少数者を優遇するアフーマティブアクションを否定する。ユダヤ・キリスト教と国家精神の価値がセットとして給されれば、少数民族が特別の権利を主張することはなくなる。リベラル派のエリートたちに広がっている複数主義や少数民族の権利の主張と財政的、政治的支援が、共有されるべきアメリカらしさを押しえつけている。ユダヤ・キリスト教の国家精神の衰えが国を弱体化させている。この価値観を共有しない人たちは米国に受け入れるべきでない。移民は民主主義のDNAを欠いて社会の害になる。

#### ◇世代論と大規模戦争による危機の解決

現在の危機は繰り返される歴史のサイクルの一つで、米国の歴史で四回目の危機だ。独立革命と南北戦争、大恐慌に続く、4回目の大転換点だ。

(注) バノンはこの論をール・ハウとビル・シュトラウスという2人の市井の歴史家が1990年代に書いた世代理論から援用している。各世代が高揚、覚醒、崩壊、危機の4つの態様を繰り返しているというもの。

転換は必要で季節のようにやってくる。都市は作られ崩壊する。国家も興隆し滅びる。現在の危機は2000年代に積み重なった結果おきた2008年の金融危機だ。社会のあらゆるレベルに蓄積された債務が米国の存続にかかわる喫緊の脅威となっている。これは、地球温暖化や医療などでちり上げの危機ではなく、本当の危機であり、国家の存立そのものを脅かしている。これまで3回の危機は大規模な戦争に結びついた。第4回目の今は、資本主義の土

台の危機であり、われわれは、イスラムファシズムにたいする世界戦争の最初の段階には  
いっている。イスラム急進主義には攻勢的な態勢をとらねばならない。いまの出来事をみれ  
ば、並外れた戦争になることがわかるだろう。脅威は IS だけに限らない。敵はイスラム全  
般だ。キリスト教にたいするイスラムの戦争は創立時に起源をもつ。第 2 次世界大戦に向  
かうとき、イスラムはファシズムより暗い勢力だった。ムスリムに好意的な米国のある非  
営利団体はテロリストのフロント（隠れみの）だし、2013 年のボストンマラソンの爆弾事  
件の背後には「ボストン・イスラム・ソサヤティ」のモスクがあった。イスラム系米国人は、  
米国憲法をイスラムのシャリアにとって替えようとしている。それはイスラムがキリスト  
教徒への暴力に根差しているからであり、米国でイスラムからのテロの脅威をおさえる唯  
一の方法は、かれらに米国の憲法を法の支配として尊重させ、ユダヤ・キリスト教の価値観  
を受け入れさせることなのだ。

◇暗闇はよいことだ

闇なら、リベラルやメディアは間違いを犯す。我々が何者で何をしているかがわからない。  
集会について NY T の記者は参加者ファラージュ（英国独立党党首）がだれだか誰も知らな  
かったと、したり顔に報じたが、彼が世界的なポピュリスト運動のカルト的な英雄だとい  
うことを 120%わかっている。メディアは恥と屈辱をするべきだ。しばらく口を閉じて黙っ  
ている。彼らは野党だ。彼らはこの国ことを何もわかっていない。なぜトランプが米大統領に  
選ばれたのか、まだわかっていないのだ。ゴールドマンサックスにいたとき気が付いたこと  
だが、彼らはニューヨークにいながらカンザスやコロラドよりも、ロンドンやベルリンに親  
しみを感じ、自分たちが世界をどう動かすかを指示しているという強い選良意識をもっ  
ている。欧州でもアジアでも米国でもラテンアメリカでも、働く人はだれもそんなこと信じて  
いない。どう生きるかは自分が一番よく知っていると思っている。

（注）トランプ政権の意味

2016 年 8 月にトランプの選挙戦を仕切るようになる前に、バノンはこの哲学を広め  
ていた。政権発足 2 週間に打ち出された政策と主張は、トランプ政権が彼の世界観を色濃く  
反映していることが明らかになっている。彼が就任演説でのべた、反エリート感情もしかり。  
「中産階級の富が家庭から奪われて世界中にばらまかれている」とか「忘れられた男女たち」  
というトランプの演説は、映画「グラウンド・ゼロ」の名セリフだ。「文明社会は団結して  
イスラム過激派のテロにたちむかい地球上から一掃しよう」という就任演説での訴えもそ  
うなのだ。

（以上）